

発掘調査の成果

城は、結晶片岩の岩山に築かれており、表土直下の岩盤を掘り抜いて遺構が確認でき良好な状態で保存されています。発掘調査からは興味深い事実が判明しています。出てきた遺物は、12世紀後半～15世紀代、16世紀前葉～後半の大きく2時期に分けられました。仮に古い時代を1期、新しい時代を2期とすると、1期は板碑、古瀬戸合子、渥美大甕など生活感の無い遺物が、2期には中国や瀬戸美濃産の碗、皿などの陶磁器類、常滑産の甕類、地元産のカワラケや火鉢など生活道具が出土しています。これら出土した遺物の年代と構成そして最終的に残った土塁や堀などの遺構から考えて、1期には山裾の大福寺に関わり板碑などが立つ宗教的聖地として使用され、



●常滑甕、渥美大甕、備前甕、瀬戸広口有耳壺



●白磁・染付碗、皿(中国)天目茶碗、稜皿、徳利、小瓶、擂鉢、合子(瀬戸・美濃)

2期には要害として城郭遺構を普請し山頂に人々が暮らしていたと考えられます。また城としては、従来考えられていたより50年程度早く築城がはじまっていたようで、16世紀の前半については、今まで考えられていた後北条氏の城とだけでは理解できない成果が上がっています。



●カワラケ、角火鉢、丸火鉢、内耳鍋、風炉



南虎口石積



北虎口石積



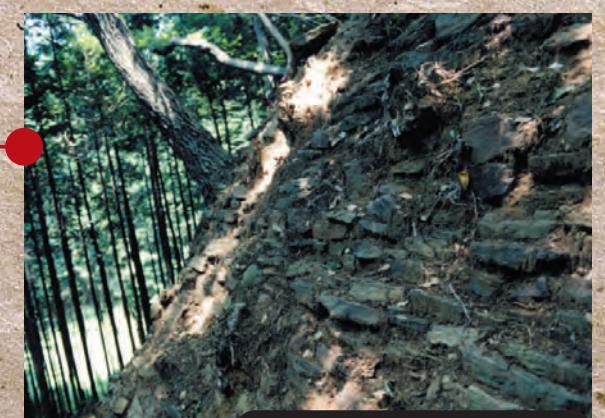
1号土塁内据雑壇状石積(東より)

石積遺構は、この城最大の特徴であり、本郭内部、虎口、郭3外面を中心に確認しています。特に郭3塁線下を中心に確認された総延長約100m高さ5mに及び累々と積まれた部分と本郭内部の南虎口から東虎口へ続く土塁内側に雑壇状に積まれた部分はこの城の性格と関わり重要な石積みです。

小倉城跡の山頂部分は当初、山の聖地として使用され、後に城郭として大規模な普請を受け変貌していったかもしれません。



2号建物跡



郭3外面石垣(北から)



岩盤

よみがえる小倉城

発 挖掘調査の成果と地形図により郭1(本郭)内部や各所の石積みなどの外観を復元的に描いてみました。

基本的な構造は居館と目される山麓の大福寺平場とその背後に展開する梯郭式の要害部分からなります。

居館である大福寺平場の前面には5m×50m程の細長い水田跡が食い違いに現在も確認でき居館に伴う構堀跡と考えられます。

山頂の要害部分に目を転じてみましょう。本郭は、上下2段の削平地から構成され、下段では現在3棟の建物と堀などの遮蔽施設が一箇所、そして東と南北の虎口にはそれぞれ門が構えられていました。建物の向きはいずれも郭内部の造成方向と同じで統一的かつ一体感のある配置であり、東虎口から南虎口へと続く土壘内側の雑壇状石積みと相俟って場の演出がされた、権力的な指向も窺うことが出来る重要な空間であったと理解されます。

本郭以外の要害部分を見てみましょう。郭2は、その東側に本郭へ向かう通路があり、通路に向かって虎口が開くことから、郭2を経ずして本郭に至る構造が特徴で、土壘や虎口の作りなど本郭には劣りますが、半ば独立的な郭であったことが伺えます。群郭式と呼ばれる型式の類型とも考えられます。



● 小倉城跡航空写真

ア 上段との間にある建物は梁行き1間×桁行き3間の細長い建物。

イ 建物は、梁行き2間×桁行き2間以上で梁方向の柱を据える穴は2m×1mと大きく且つ深さも0.7m以上であり、或いは高さを求めた建物となるかもしれません。類例を含め確認中であり現在詳細は不明です。

ウ 中央部分の建物は大部分がトレ

チ調査範囲外に伸びるためはっきりとした規模は分かりません。大きな1棟の建物か何棟かの建物が隣接して所在するのかもしれません。場所的には、城の中心である本郭の更に真ん中に当たりこの城の主屋と考えることも出来るかもしれません。

エ 建物の南でイの建物の西に位置する本建物は梁行き1間×桁行き6間で

すが梁間が約1mと狭い為、築地のような遮蔽構造物と考えました。

オ・カ 本郭虎口は、東と北南の三箇所あり、オ北虎口とカ南虎口の一部を調査しています。いずれも同じ構造が予想され、通路部分に対し凸型に石を積み突出部に門を構築したものと考えられます。北虎口では門に伴う礎石の一部を確認しました。

本 郭東虎口前の平場から郭3にかけてはその外周部分に全面石積みが普請されています。城内の他の外周部分に石積みが有るかどうかは未調査で分かりませんが、仮に郭3周辺のみ大規模に石積みが展開しているのであれば、やはりその規模からこの部分も「見せる石積み」と考えられます。その場合、東方面から登城するルートが重要な位置づけになります。その他、この城には何本かの登城ルートが存在しましたが主要なルート上には石積虎口が確認されています。

また、堀切との関係で郭4-郭2腰郭、郭3-本郭東虎口前平場の間は橋が架けられていたと思われます。

小倉城復元鳥瞰図

※郭1以外は発掘調査が行われていない為、石積み、橋以外の構造物は描いておりません。

キ 南虎口から東虎口へ続く土壘内裾には三段にわたる雑壇状の石積みが普請されています。この部分の石積みは、他の場所より、やや大きく粒の揃った石材が使用されていて見た目を重視した化粧的な意味合いの強い「見せる石積み」と考えられます。土壘裾には硬化面が確認され南虎口と東虎口を結ぶ通路の存在が予想されます。